

大正噴火時の住民避難行動

1 はじめに

桜島大噴火後に、速やかな軽石道路啓開や道路復旧が可能となるには、路上に道路啓開や復旧の支障となる放置車両がないことが絶対条件である。これが達成されないと、救援や復旧の遅れにより鹿児島市民の多くの人命が危機に瀕することになる。したがって、軽石道路啓開の一側面として、大噴火後の緊急自主避難と住民心理について考察し対処法をのべる。

2 大正噴火開始直後の鹿児島市民の心理

1月12日の午前10時ごろ始まった噴火では、当初は爆発音や振動も無く、鹿児島市民は、大噴煙を大自然の壮観として眺めていた。天高く噴き上げる煙を始めて見た市民には恐怖感は全くなかった〔柳川喜郎, 1984〕。ところが、噴火が次第に激しくなると、不安感が増大し、避難者が出始めている。18時29分の大地震が起きるまでは、避難者は多少の荷物を持っていたが、その後の避難者は着の身着のままで避難し、当時のパニックとも呼ばれる心理状況が読み取れる。この状況について、例えば桜島大爆震記〔鹿児島新聞記者十余名共著, 1914〕では、大烈震後は、「阿鼻泣喚の巷となれり」と表現している。噴火後直後には、対岸の火事的に見ていた市民が、噴煙柱の巨大化とともに不安を感じ、12日午後になり、爆音が大きくなると、不安感が増大している。

大地震前の心理状態を鹿児島県警察史（1972）から引用すると、午後2時30分頃には、噴煙で桜島が見えなくなり、日光がさえぎられて暗くなっている。午後3時30分からは爆発音が起き、その後「百発の砲弾が同時に空で破裂するみたいに大きく、そのために空震が激しく、戸や障子や窓ガラスなどがガチャガチャと音を発したり壊れたりで、人の心は戦慄呆然の状態であった。」その後、午後6時30分には噴火に伴うマグニチュード7.1の強い地震があるが、鹿児島県警察史からは、大地震が起きる前の状態でも人々は呆然とするほど強い恐怖感を抱いていたことが解かる。その状態で大地震が起きたので、地震後にパニック※が発生したと考えられる。

なお、この状態は鹿児島市内にいた住民の心理状態である。結果的には、地震を除くと避難の必要は無かったのであるが、住民心理は怯えあがったとみる方が良さそうである。

※：本文で使用するパニックは、次の意味である。個人または集団において突発的な不安や恐怖（ストレス）による混乱した心理状態、またそれに伴う錯乱した行動を指す。

3 大正噴火時の避難行動

桜島が大正三年に大噴火した後、鹿児島市民は伊集院方面に避難したと言われている。この状況を、桜島噴火誌（桜島噴火誌編さん委員会編 1988）から引用して下記に示す。

噴火直後は、対岸の火事を見るような気持ちで見物していたが、噴煙がますます強大となり岩石が飛び交い、爆音がしばしば起こるに至ってあやぶみ始め、危険や災害が身近になっているのではと不安にかられているところに、「毒ガスが山からでて窒息の恐れがある」とか、あるいは、「津波が押し寄せてくる」とかの流言飛語が伝わり、市民の恐怖の念はだんだんとその度合いを高めていった。

12日午後6時29分の大烈震が起こってから後、・・・7万市民はあわてふためき伊敷あるいは伊集院、市来、串木野方面へ次々と避難し始め国道には人馬があふれ、駅は空前の混乱をきたした。混乱のなかで「高潮は下町を浸し、県庁付近まで水浸しであった」との飛語が伝わったので、・・・無我夢中となって伊敷方面へ逃げ出すなどその混乱ぶりは想像以上のものとなった。

抜粋 桜島噴火誌（桜島噴火誌編さん委員会編 1988）

この時の様子について、当時の新聞記事は次の様に伝えている。

・1914 年 1 月 13 日 鹿児島新聞

噴出する炎は、南東の風に送られて全く天を覆ひ午後一時頃に至っては、火山灰粉々として市内に落ち来たり処に山の手方面は風に吹き付けられて天地ほとんど晦冥に帰し鳴動は刻一刻加わり来たり愈々凄まじき光景を呈したれば、市民も或いは海しゆく襲来恐れて夫々安全の地に避難しつつあり其の光景悲惨を極む。

・1914 年 1 月 15 日 鹿児島朝日新聞号外

第七高等学校 篠本教授の見解 「津波の危険性も毒ガスの危険性も無い」 県知事の警告 「浮説に気を付け惑わされることが無いように注意すべし」

4 流言飛語の実態

大噴火後、当時 7 万人いた鹿児島市民は避難行動を開始し、鹿児島市はほとんど空っぽになった。この行動の原因となった「毒ガスの襲来」と「津波」については、その後デマと流言飛語の言葉で記載されている。今日、デマと流言飛語の意味は、下記の意味とされている。

・デマ（① 政治的効果をねらって、意図的に流される虚偽の情報。悪宣伝。 ② 根拠・確証のないうわさ話。流言蜚語りゅうげんひご。）

・流言飛語（意味：世の中で言いふらされる確証のないうわさ話。根拠のない扇動的な宣伝。デマ。）

さて、本当にデマや流言飛語として一笑に付したり知事が述べたように「浮説に気を付け惑わされることが無いように注意すべし」と広報すれば解決するものであろうか？デマや流言飛語であれば、それに惑わされないようにすれば良いのであるが、人間の感情を含めて考えると、実態はもっと根本的なものであり、大正噴火から 100 年経過した今日でも、同じ規模の噴火があるとおなじような混乱が起きうと考えられる。まずは、当時の状況を生々しく伝える鹿児島西高令者学級の「大正三年桜島大爆発の思出集 1972 年」から、体験談を拾ってみよう。

【体験の要約】

①噴火時の住所 鹿児島市上竜尾町 女性 明治 31 年生まれ

13日、誰いうことなく、津波がくるといふ噂がたった。とにかく避難した方が良いということ

になった。・・・桜島の鳴動は、間 あいだ なく時なくつづいていたので、いつ溶岩の流れにおしつぶされるか解らないといった恐怖心につきまとわれていた。それやこれやで、やっとのことで列車が動き出した時にはこれで、地獄の三丁目からなんとかして抜け出すことが出来るのだという安心感が、一次こみ上げてきた。

②噴火時の住所 鹿児島市仲町 女性 当時高校生

ガスが来るから夜が明け次第、もっと遠方へ避難しなければならないという。津波のデマは、中馬来太郎、または中馬太郎のまことしやかな名前で広がっていた。・・・伊集院方面への避難の途中、小山田まちかくまでいった折り、ひきかえしてくる人々の話では、伊集院あたりで温泉が噴き出して危険であるということである。前にも進めず、後ろにもひけず絶体絶命といった姿である。

14 日朝の市内方面から自転車にのってきたひとの情報「七高の石垣の中程まで津波が押し寄せてきている」という。小山田まで津波は来なくとも、いつガスが来るかもわからないと思いつつ、不安な気持ちでいっぱいであった。

③噴火時の住所 鹿児島市金生町女性 明治 35 年生まれ

（伊集院への山路を避難途中の列にいる情況 夜）これらの列の中から、津波のデマが一波、万波を呼ぶごとく伝わってきた。「津波が来たぞー」とまるで、津波がおしよせてくるように、人々の口の波を引き起こして、伝えひろがったものです。・・・「もう市の海岸は海になっている」

④噴火時の住所 伊敷村神伊敷 女性 明治 34 年生まれ

絶え間ないゴー音とともに、噴き上げる煙は、見る見るうちにのびてゆく。そのうちにあの煙は、毒ガスだ。あの煙が自分達の頭の上まで伸びてきたら、いっぺんに地上に落ちてきて、みんな毒ガスにやられて死ぬ。などの話がひろがっていった。

⑤噴火時の住所 日置郡阿多村 女性 明治 35 年生まれ

村の青年たちが役場からの使いだと言って来た。「ここから六里先まで避難せよ。出ないと危険だから」と伝えていった。おじさんたちも、どうしよう、どうしたら良いかとおろおろしていた。

当時の体験談では、大噴火で身の危険を感じている様子がうかがえる。その噴火時の不安は、桜島から遠く離れた日置郡阿多村でも感じられている。大正三年の噴火では、真冬の偏西風のために、噴煙のほとんどは東側に流れた。ところが、噴煙の傘は圧力が強いと風上にも広がるので、④の体験談では、噴煙が鹿児島市の上空まで伸びてくる危険を感じている。

体験談などからは、次の点を読み取れる。

【大正噴火時の流言飛語の性質】

- ①大正噴火時のデマと今日呼ばれることが多いが、デマを「政治的効果をねらって、意図的に流される虚偽の情報」とすれば、当時の流言飛語は全くデマでは無い。
- ②デマと呼ばずに流言飛語とよべば、確かに「世の中で言いふらされる確証のないうわさ話。」ではあるが、「根拠のない扇動的な宣伝」では無かったと考えられる。扇動するメリットが無いからである。

見たことも無い火山の大噴火の様子を目の当たりにして、各個人が火山現象に身の危険を感じている状況下で、さらに「津波」「毒ガス」などのリスクが伝聞されると、人々が、その内容に半信半疑でも、リスク回避のためにとりあえず避難しようとすることは、今日においても合理的で賢明である。通常、大地震が起きた場合は、津波が来るか来ないかはその段階では不明であるが、とりあえず安全側に避難しようとする。あるいは、大雨で、自宅裏の崖が崩れるか崩れないかは不明であるが、念のために避難所に避難する行動がとられる。この安全性に配慮する賢明さが、非常に多くの人命を救っていることも事実である。正確な情報が把握できないときに避難行動を行うことを、デマとは呼べないし、「流言飛語に惑わされるな!」と言うことも適切では無い。

さらに、科学的な知識が今日より少なく、テレビジョン・ラジオ・インターネットなどの情報手段が無い状況では、人命に危険を及ぼす可能性がある大噴火を起こした火山からとりあえず離れようとする行動は、信頼できる情報が無い段階では賢明な避難行動とも考えられる。決して、デマや流言飛語として一笑に伏すことが出来るような行動ではない。したがって、当時鹿児島市民が避難した行動は、信頼できる情報が無い中での、当時の段階としては適切な緊急避難行動と見ることが出来る。

5 次の大噴火時の避難行動

科学が進歩し、情報機器が発達した今日では、大正三年と同じような市民の避難行動は起きないであろうか？高層の偏西風が弱く、火砕降下物が薩摩半島側に降ってくる場合について検討する。

写真-1 は、噴火開始 30 分後に桜島の南東 11.5 kmにある垂水市で撮影されたものである。桜島の東側と西側の噴火口から噴煙柱が立ち登っているため、桜島の山体とほぼ同じ幅の噴煙柱が見える。この時には上空で恐らく噴煙の傘が成長し、空を覆いつつあったであろう。すさまじい光景である。

次の大噴火でどの地点に火口が出来るかは解らないが、大正噴火で最も西側に出来た火口からは、対岸の鹿児島新港までの距離は、僅か 4.5 kmしかない。この距離で、噴煙柱がむくむくと激しく上昇する姿や、噴石の落下、夜は赤い火山弾の落下を目の当たりにした住民は、

大正噴火時と同じように不安感や恐怖感を覚えるであろう。噴火口が桜島の南北2か所に出来ると、概ね桜島の幅と同じぐらいの噴煙が上昇し、さらに上空を噴煙の傘が覆うので、住民が不安になるのはごく自然な心理である。参考までに述べると、津波が襲ってくると言われた原因は、市民が噴火時の光景を見て、桜島が崩壊して錦江湾に土砂が突っ込み、津波が発生すると考えたものであった。島原大変肥後迷惑と同じ現象である。噴火最盛期を過ぎて、再び鹿児島市に帰ってきた人々からは、桜島が崩れることなく、「噴火前と同じ姿を保っていることに逆に驚いた。」との記述がある。大事な点は、それほど大正三年の噴火は、人々の心に不安と恐怖を植え付けたのである。今後起きると予想されるのは、このような噴火である。

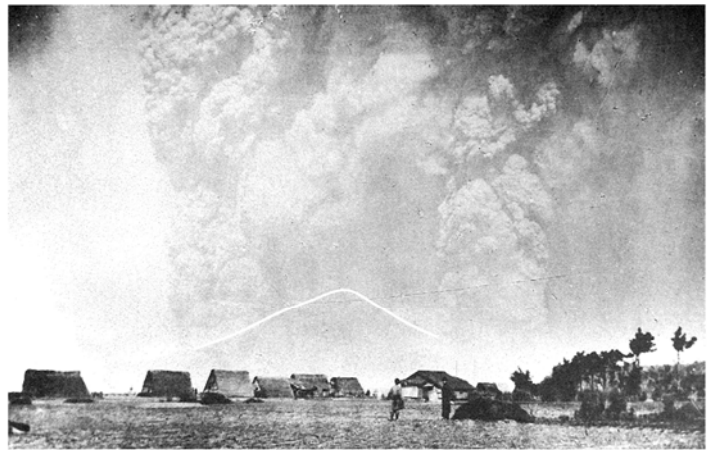


写真-1 垂水で撮影された噴火開始 30 分後の状況

桜島の姿を白線で強調した。

出典 大正三年 桜島大噴火写真集 鹿児島県教育委員会



図-1 大正噴火の最も西側の火口位置と南北に噴煙柱が立ち登った想定

さらに、今日の視点で見たとき、津波に関しては、火山性地震や海底噴火に伴う津波の発生や桜島の山腹崩壊に伴う津波発生危険性も完全には否定できない要素であり、大正三年の避難行動を単に「デマ」と「流言飛語」に惑わ

された人々とみなすことは不適切と考えられる。

実際は、正確な情報が無い中で、噴火の凄惨な様子を見て、豪雨に驚き、揺れに驚き、避難行動を開始したと考えられる。次の大噴火の際にも、同様の避難欲求が起きる可能性がある。同じ自然現象を見ても、恐怖の感じ方は人それぞれであり、噴火後に一刻も早く逃げたい人も現れると考えられる。比較的冷静である人々も、恐怖を強く感じた人の擁護のために、一緒に避難行動を起こさざるを得ない場合も多いと考えられる。